

て樂屋に入り込んで、山出しの女が、練習服で、一生懸命にや  
つて居る所を見せて、足の屈伸、肩の運動、一として觀察を遣  
れず、練習の苦痛が全身に顯はれたのをはつきり示すのであ  
る、即デウガ―は嗜好趣味の向いた儘をなし、其畫は、實に申  
分なき巧妙の與ふる美を表はし、天才と熟練で出来る限りの事  
はやつて居る、是等は實に素敵な繪畫で、どんな美術家でも見  
たら、感心せずには居られぬことデウガ―自分がレオナルドの  
作を見て嘆美すると同様である、然し其畫の生命は惜いかな、  
レオナルドの、か是从らと云ふ所で止んでしまつてゐる。

(シモンヅ稿)

## 伊勢の一日

與 太 郎

◎太平洋畫會の幹部が、瀬戸内海を寫生旅行に伴れられて、小  
豆島に遊んだ歸り途伊勢に廻つた、無論太廟を參拜の爲に。  
◎其の前日迄の伊勢は、東宮殿下行啓で賑つたが、後の淋しさ  
は大風の風たやう、ひっそり閑として、參拜者の影も粗で、朝  
熊山嵐は寒かつた。

◎名代のお杉お王が三味の音色も聞えず、相の山は空氣銃の射  
的が二三軒店を開ひて居るばかり、軒の暖簾も色褪せて人影な  
く、古市の通りは寂寞であつた。

◎旅店に客呼ぶ聲も罕に、物産もの賣る店も霜枯れて、薄ら寒  
さうに哀れになつたが、御當地名代の赤福餅だけは店一杯に客

が居た。

◎太廟は申すも畏しや、されば伊勢の名物は備前屋が音頭でな  
い、朝熊山の萬金丹でない、將又神路山の杉箸でもない、矢つ  
張り我が下戸黨の赤福餅に止めを刺さうよ。

◎流れぞ清き五十鈴川に嗽けば、心地も自らすがるしい、内  
宮外宮の神の森、白木の宮居の影清く、木の香の馨る處、白衣  
の人の徘徊する様、目に入るもの皆嬉しくて、目出度く參拜を  
済ました。

◎其の後撤下御物を拜覽し、徴古館、農業館をも見、夜は友と  
割烹戸田屋に酌んだ、席は曾て伊藤公が宿とした處とかで、清  
酒にして頗る贅を極め、料理亦口に適したれば、大に食ひ、且  
つ下戸なからも大に飲む。

◎宿なる五二會ホテルに歸れば、其處も亦姉崎博士、泉鏡花氏  
等が宿りし處とか、今日は絶代の偉人が宿に飲み、現代の名士  
が跡に宿る、何と間の好い事やら、伊勢の一日は斯して誠に居  
心の好い旅寢であつた。

\* \* \* \*

□自轉車獨案内を讀むでも直く自轉車にはうまく乗れないが、  
まるで何も讀まずに稽古する人よりも早く乗れるやうになる、  
獨案内も決して無益ではない。